



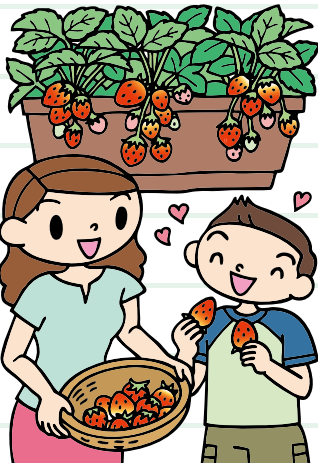
イチゴ バラ科オランダイチゴ属

果物屋でも八百屋でも売られているメロンやイチゴは、果物、それとも野菜でしょうか。

植物的分類では、野菜は毎年種をまいたり苗を植えたりして収穫する一年生の草本作物で、果物は樹木に結実する実を何年にもわたり収穫する永年性の木本作物です。

ウリ科のメロンは種から育てて、1年以内に収穫を終える草本作物なので、植物的分類では野菜です。イチゴはバラ科で、バラ科は永年作物ですから果物になります。

農林水産省の統計ではメロンやイチゴは野菜として集計されますが、同省が認可監督する中央卸売市場では果物として扱われます。メロンやイチゴは「果物的野菜」に分類するのが良いのかもしれませんが、イチゴはベランダでも簡単に栽培でき



ます。10月になるとキッチンガーデニングの品種の苗がホームセンターなどの店頭に並びます。ポット苗に付いているラベルの写真と説明を見て、好みの苗を購入します。

深さ15cm以上のプランターをベランダの日当たりの良い所に置き、市販の培養土を入れます。株間15〜20cmに、クラウン（根茎部分）の根元が見えるくらいに浅植えします。土が乾いたら冬でも水やりをします。

活着する11月上旬〜中旬と、葉茎が本格的に伸びてくる2月下旬〜3月上旬に1000倍の液肥を1週間置きに施します。黄色く枯れた葉や赤くなった葉は、葉の付け根から丁寧にかき取ります。

品種やその年の気候によっても多少異なりますが、5〜6月に収穫できます。赤くなった物から収穫します。果実には手を触れずに、果梗（かこう）のところを爪で摘み取ります。

収穫が終わると、親株からランナーが伸びて子株ができます。この子株を育てて苗を作ります。これを毎年繰り返します。

数年後にイチゴを収穫しながら「このイチゴは〇〇ちゃんが生まれた年から栽培しているのだよ」という会話ができるかもしれません。

栽培計画 1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月

栽培計画	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
トンネル栽培				🌱	🌱		🌱			🌱		
露地栽培				🌱	🌱		🌱			🌱		

🌱 親株植えつけ 🌱 ランナー挿し 🌱 植えつけ 🌱 トンネル被覆 🌱 収穫



JAグリーン
津店が教える！
イチゴ栽培の
ポイント



《水やりについて》

植物は午前中に活発に光合成をするので、水やりは朝に行うのがベストです。イチゴは冬の間に冬眠するので、葉や茎葉はほとんど成長せず、吸い上げる水の量も少なくなりますが、内部では春の成長に向けた準備が始まっているので、乾燥させすぎないように注意してください。

また、水を上から勢いよくかけると、葉や果実に土が跳ね返って病気の原因になります。株元近くに静かに与えるようにしましょう。

《病害虫対策》

花が咲き始めたら、病害虫にも注意。収穫までは害虫や鳥対策が必要になるので、防虫ネットをかけるのもオススメです。

主な病気はうどん粉病、灰色かび病、炭そ病など。風通しが悪く湿った環境だと発生しやすいので、風通しの良い環境を心掛けましょう。

《肥料のやり過ぎに注意》

イチゴを家庭菜園で育てている方から、「花が咲かない」とお問い合わせをいただくことがありますが、その原因のひとつが、肥料のやり過ぎです。用法用量を守って大切に育てましょう。



ホウレンソウ (アカザ科ホウレンソウ属)

ビタミンやミネラルを豊富に含む緑黄色野菜で、特に日本人に不足しがちなビタミンB群や、造血作用に関係する葉酸、そして鉄分とカリウムが多いのが特徴です。生育の適温は、15〜20度で冷涼な気候を好み、耐寒性は強いが暑さには弱く、25度以上になると生育が衰えます。関東以西の地域では、夏取り以外は栽培できますが、冬取りの栄養価が高く、甘味も増し最もおいしい季節です。

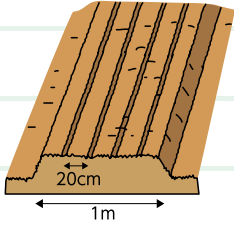
【品種】秋取りは生育の良い「アトラス」(サカタのタネ)、「オーライ」(タキイ種苗)、「ハンター」(カネコ種苗) など、冬取りは寒さに強い「ソロモン」(サカタのタネ)、「トライ」(タキイ種苗) などが良いでしょう。

【畑の準備】ホウレンソウは酸性土を嫌うため、事前に1平方m当たり苦土石灰150gを畑全体に散布してよく耕しておきます。次に、幅1mの広幅の栽培床を作り、1平方m当たり化成肥料(N-P-K=10-10-10)150gと堆肥2kgを土とよく混和しておきます。

【種まき】適期は9〜10月。栽培床は平らにならし、条間20cm、深さ1〜2cm程度のまき溝を切り、まき溝を板切れを立てて平らな溝に仕上げ、1cm間隔に種をまきます

(図1)。1cmほど覆土し、たっぷり灌(かん)水します。そして、風雨や害虫か

図1 種まき



土を軽く盛り上げて幅1mの栽培床を作る。板切れなどで幅2mm、深さ1〜2cmの種まき溝を付け、1cm間隔に種まきする

ら幼苗を守るため不織布をべた掛けします(図2)。

【管理】1回目は発芽そ

ろい時に込み合っている所の株を抜き取り、その後、2〜3回に分けて最終的に株間を4〜5cmにします(図3)。

栽培期間が長い10〜11月まきでは、草丈10〜15cmのころ、1平方m当たり30gを追肥し、株元に軽く土寄せします(図4)。

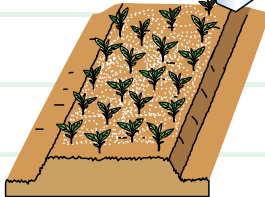
【病害虫の防除】

ヨトウムシは見つけ次第、捕殺し、アブラムシには、気門閉鎖剤(商品名:粘着くん液剤)などで防除できますが、不織布をべた掛けして飛来を予防すると良いでしょう。

【収穫】草丈が25cmくらいを収穫の目安にしますが、30cm程度になってもホウレンソウ本来のおいしさは変わりません。株元の根を鎌やさみで切り取ります。直売所などに出荷する場合は、枯れ葉を除いて300gくらいに束ねます。

※関東南部以西の平たん地を基準に記事を作成しています。

図4 追肥



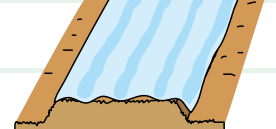
草丈10〜15cmのとき、化成肥料を条間にまき、移植などで土寄せする

図3 間引き



発芽そろいの後、密生部を間引く。その後2〜3回に分けて間引き最終的に1本立てにする

図2 べた掛け



風雨や害虫から守るために、不織布をべた掛けする

栽培計画

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
秋まき栽培									①	①		
トンネル栽培			①							①		

① 種まき ② トンネル被覆 ③ 収穫



ホウレンソウ栽培のポイント

ホウレンソウは、日差し強い時期の真夏を除きほぼ1年中栽培・収穫が出来る野菜ですが、耐寒性があり霜にあたることで甘みが増します。そのため、12月〜1月頃に収穫すると肉厚で旨味のあるホウレンソウを楽しめます。

《間引き》

ホウレンソウは、種をまいてから7日程度で発芽します。発芽後に間引きを行い、間引きは本葉が2枚程度出たら1回目の間引きをします。その後、本葉が3、4枚程度出た頃に2回目の間引きを行います。

《JAグリーン津店では》



- ・オーライほうれん草 (タキイ種苗)
 - ・トライほうれん草 (タキイ種苗)
 - ・次郎丸ほうれん草 (ニチノウ種苗)
- などの品種を取り扱っております。